
ハイパーテキストにおけるテキスト布置構造

——筒井康隆『朝のガスパール』と中野独人『電車男』における作者と読者——

重見晋也

〈名古屋大学〉

はじめに

テキストを支える支持素材・支持媒体は、歴史的に見れば音声によるテキストから書写テキストそして活字テキストへと変化している。現代においても、世紀の転換期からテキストの支持媒体に猛烈な変化の波が押し寄せていることは明らかであろう。すなわち、コンピュータの普及に伴い、紙の上に印刷された文字に代わって、ディスプレイに表示された文字を利用するようになったのである。

この現象は残念ながら世界的なものといえる。一例として、2009年8月18日付で *Le Monde* を初めとしてフランスの新聞各紙に掲載された記事を挙げることができる。記事は¹、世界最大のインターネット検索エンジンである Google がフランス国立図書館との間に、図書館の蔵書をデジタル化する契約を締結したことを報じている。これは2006年5月から開始された Google が進めるインターネット・サービス Google Books の一環であり、Google Books はアメリカを中心として世界30の図書館が参加しているインターネット上のサービスである。フランス国立図書館と Google との提携は、フランス国内においてはパリ市立図書館との契約に次いで2例目となる。Google では、このような契約をもとに各図書館が所有する印刷物のデジタル化を進めており、700万冊以上のデジタル化した印刷物を Google Books サービス上で利用者が自由に閲覧できるようにしている。対象となっている著作物は、著作権が切れているものが中心となっており、予め契約を締結した出版社からの著作であれば新刊を購入することも可能になっている。賛否両論あるとはいえ、この記事が示すように、テキストのデジタル化という潮流は、当分の間とどまることがないように思われる。

デジタル化されたテキストはどのように閲覧されるのか？ 既知のように Google は Web というネットワーク・サービスを使って共有されている情報を検索するサービスを提供している会社である。そして Web は World Wide Web Consortium、通称 W3C という団体によって標準化された技術の上に成り立っている。これは技術的には「HyperText Markup Language」という規格を基本に使っており、Web で閲覧するテキストはすべて「ハイパーテキスト (hypertext)」という分類に属しているといえることができる。この言葉を生んだアメリカの研究者セオドア・ネルソンは1965年の論文の中で、ハイパーテキストを「紙の上では表現したり再現したりすることができないような複雑なやり方で文字や画像素材を関連づけている全体」²と定義づけている。すなわちネルソンは、デジタル化されたテキストには、紙の上に印刷されたテキストにはない特殊

1 « Google voudrait créer la plus grande librairie privée de l'histoire », *Le Monde*, 18 août 2009. [電子版 : URL : “[2 “a body of written or pictorial material interconnected in such a complex way that it could not conveniently be presented or represented on paper”: Theodore Nelson, “A File structure for the complex, the changing and the indeterminate”, T. H. NELSON, at the *ACM 20th National Conference*, 1965, p. 96.](http://www.lemonde.fr/culture/article/2009/08/18/la-bnf-negocie-a...la-numerisation-de-son-patrimoine_1229430_3246.html#xtor=RSS-3246”]”]</p></div><div data-bbox=)

な性質があると主張するのである。こうした主張がなされた当時にはまだハイパーテキスト自体が存在していなかったわけだが、1990年代に元来軍事目的で開発されたインターネットが民間に開放され、続いてCERNのティム＝バーナーズ＝リーらによってWebサービスの基本的な技術が開発された。その後ハイパーテキストの技術が社会に浸透する基盤整備が完成すると、インターネットが社会に普及してきた1990年代から、人文学的な視点でハイパーテキストを対象として研究を行うハイパーテキスト論がアメリカで始まった。

ハイパーテキスト論で強調される紙のテキストに対するハイパーテキストの特徴にはいくつかあるが、揺籃期から研究を続けているジョージ・P・ランドゥに依拠すればそのポイントは次の5つになる：1) テキストの再布置化³、2) 作者の再布置化、3) エクリチュールの再布置化、4) 物語の再布置化、5) 文学教育の再布置化⁴。以上5つの論点はそれぞれに関連し合いながらもそれぞれがテキスト解釈に関わる論点を含んでいるのだが、「作者の再布置化」の問題はテキスト布置の問題に直接関わっており、とりわけ重要であると考えられる。

「作者の再布置化」に関するランドゥの論点は、ハイパーテキストによってこれまでに作者がテキストに対して持っていた権力の一部が読者に与えられるようになることと主張することにある。ロラン＝バルト、ミシェル＝フーコー、ジャック＝デリダ、ジャン＝フランソワ＝リオタール、クロード＝レヴィ＝ストロースといったフランスの批評家・哲学者やアメリカの文学者エドワード＝サイードらの主張をパラ＝フリーズしながら、テキストを統括すると見なされてきた「作者」という中心がもはや存在しないことをランドゥは確認する。その上で、実際にハイパーテキストを生成する際には、文字や画像などといった断片的で離散的なテキストをつなぎ合わせ、リンクさせていくことであらわれるテキストの可能性がハイパーテキストの生成には重要であると述べる。そこからさらに、アメリカ・ブラウン大学において開発されたハイパーテキスト・システムでランドゥ自身が行ったアメリカの現代作家グレーム＝スウィフトの『ウォーターランド』を題材とした授業演習を例に挙げ、共同執筆などによってもたらされる一人の作者に収斂していかない共同作者性という特質が、ハイパーテキストには存在するのだと述べる。こうしたランドゥの主張は、「作者」という単一のフィギュアによって布置が形成されていたテキストが、ハイパーテキストではそこに「読者」という別のフィギュアが加わり、それらが一緒になることで様々なテキストを布置していくような再編つまりは再布置化 *re-configuration* という指摘を含意しているといえよう。

テキストを、われわれの認識と解釈を通じて初めて現象として存在するにいたるなものかと思えば、現象としてのテキストをさまざまな部分が集まって構成された複合体と考えることができる。そして、そのような部分としての形象 *figure* を組み合わせていくことこそが、*re-con-figuration* つまり「再布置化」ということばが表している事態であると理解することができる。ランドゥのハイパーテキスト論の根本に存在しているのはこうしたテキスト観であり、その上でランドゥを含めたハイパーテキスト論の論者たちは、ハイパーテキストがこれまでわれわれが考えていた「テキスト」とは別の「テキスト」の形象化を要求しているのである。換言すれば、彼らの主張は、ハイパーテキストが紙の上に印刷されたテキストとは全く異なる存在様式の可能性を指摘しているのである。

本稿では、テキスト布置構造に関してハイパーテキスト論の論点から指摘される「作者の再布置化」という問題に焦点を当て、本当にハイパーテキストによって紙のテキストとは異なる「作者」にわれわれは出会っているのか、ハイパーテキストが作者の再編をもたらすのか、この点を2つの現代日本文学作品、筒井康隆

3 「再布置化」は、原文では“reconfiguration”。

4 George P. Landow, *Hypertext 3.0: critical theory and new media in an era of globalization*, Johns Hopkins University Press, Baltimore, 2006.

の『朝のガスパール』⁵(1992)と中野独人の『電車男』⁶(2005)に例を取りながら検証していきたい。ただし、物語テキストにおける「作者」については、バルトの「作者の死」における考察⁷に従い、エクリチュール行為を行使する現実世界にある「作者」ととらえるのではなく、物語世界に実在するかぎりにおいての、換言すれば物語世界から演繹することができるかぎりにおいての「作者」に限定する。その意味において「語り手」としての役割を担うこともあることを付言しておく。

1. 読者の参加と作者の統御——『朝のガスパール』における「スパイラル構造」

1.1. 生成コンテキスト

『朝のガスパール』は、朝日新聞の朝刊に連載されたいわゆる新聞連載小説で、1991年10月18日から1992年3月31日までの合計161回にわたって発表された作品である。連載分に加えて1991年10月8日付で出された『朝日新聞』連載開始にあたってと1992年4月6日付の「連載を終えて」を含めて、1992年8月に単行本化され、その年の第13回日本SF大賞を受賞している。

この作品は、筒井自身が「メタ・フィクション」と名付けるような⁸、語り手自身が語っている物語の論評を行っていくという、18世紀のイギリス人作家サミュエル・リチャードソンやローレンス・スターン、あるいは同じ18世紀の哲学者でスターンの『トリストラム・シャンディ』から多くの影響を受け『宿命論者ジャック』を書いたドゥニ・ディドロ等も用いた物語技法であるという点を考慮すると、極めて古典的な作品であるといえる。しかし、先達たちがサロンで原稿を朗読することで読者からのフィードバックを得ていたのに対して、筒井は当時まだ一般にはそれほど広まっていなかった、パソコン通信上の掲示板システムを利用して、読者からの意見や感想を募り、その結果を『朝のガスパール』という作品に逐次反映させていったのである。実際、1991年10月8日付の「連載開始にあたって」の中で筒井は次のように述べている。

毎日、ほんの少しずつ虚構が展開していき、それを毎日読者が読む新聞連載という特殊性を生かして、[...]新聞読者の意見を小説に投影させ、それに沿って展開をおしすすめたいと思う。[...]パソコン通信をしている読者諸君は、作者も参加しているパソコンネットに加入の上感想をお寄せ願いたい。そこであれば作者からのメッセージをご覧になることも可能である。(pp. 5-7)⁹

事実、パソコン通信の掲示板（以下、BBSと略す）でのやりとりが、編集され抄録という形式ではあるものの『脳筒井線 [朝のガスパール・セッション]』全3巻として、作品本編の連載と並行して刊行されているのである¹⁰。このように本作品は、「語り手による論評」という古典的な物語技法にパソコン通信という現代的な要素を加えてできあがった小説だといえることができる。このような作品生成の背景を考えると、「読者をどのように作品に加担させるのか?」、という問いが重要なテーマの一つとして浮かび上がってくるといえるが、分析に入る前にまず簡単に物語の内容を紹介しておく：

SF作家の櫛沢は、読者から投書やパソコン通信経由で感想をもらいながら、新聞に連載小説を発表

5 筒井康隆、『朝のガスパール』、新潮文庫、新潮社、1992。

6 中野独人、『電車男』、新潮社、2005。

7 Roland Barthes, « la Mort de l'auteur », *Œuvres complètes de Roland Barthes*, tome III 1968-1971, Seuil, Paris, 2008, pp. 40-45.

8 筒井と「メタ・フィクション」概念の関係については、次を参照のこと：柘植光彦、「筒井康隆・〈メタフィクション〉」、『國文學：解釈と教材の研究』、6月号、學燈社、1991、pp. 96-97。

9 本章において本文および注に付したページ番号は、特に指示のない限り、新潮文庫版『朝のガスパール』でのページ番号を示す。

10 筒井康隆編著、『脳筒井線 [朝のガスパール・セッション]』、朝日新聞社、1992（以下、『part 1』と略す）；筒井康隆編著、『脳筒井線 [朝のガスパール・セッション] part 2』、朝日新聞社、1992（以下、『part 2』と略す）；筒井康隆編著、『脳筒井線 [朝のガスパール・セッション] 完結編』（以下、『完結編』と略す）、朝日新聞社、1992。

している。小説では大企業の重役の間ではオンライン・コンピュータ・ゲーム『まぼろしの遊撃隊』が流行しており、金剛商事常務・貴野原征三もゲームに夢中になっている、ゲームはプレイヤーがゲーム内の登場人物に「シャドウ」として自己投影することで、登場人物と一心同体となることができるというものである。一方で貴野原夫人である聡子は夜な夜なパーティーに参加することが日課となっている。パーティーに参加するための資金を捻出するために株への投資をしていた聡子だが、折からの不況により巨額の負債を抱えている。損失を夫に知られないために、「ネットサラ金」にも借金をしたが支払期日に利子を入金できなかったため、夫の会社にもコンピュータネットワーク経由の取り立てが行われ、損失は夫の知るところとなる。金融業者は利子の取り立てのために貴野原邸に武装して乗り込むが、そこには『まぼろしの遊撃隊』の「シャドウ」が「レベル」を超えて、聡子を守るためにやってきており、両者の間で激しい銃撃戦が繰り広げられる。

1.2. 物語世界と物語時間の「スパイラル構造」

内容から判断すれば、ありきたりな家庭崩壊の物語に筒井一流の荒唐無稽な要素を加えた小説といえるが、この作品の特徴として2点を指摘することができる。第1点は、物語の構成が筒井が「スパイラル構造」と呼ぶような循環的な構成が取られていることである。そして第2点目として、「スパイラル構造」を支えている物語世界のレベルと物語時間の進行が作者に制御されているという点である。

1点目の「スパイラル構造」については、新聞連載当時、朝日新聞社で筒井担当だった大上朝美が、文庫版『朝のガスパール』の巻末に寄せた「電腦録——解説にかえて」というテキストの中で、『朝のガスパール』多重虚構構造として、小説の5つのレベルを紹介している：「1) 現実の筒井康隆と読者たち物語世界外の存在、2) この小説を書いている第二の自己としての筒井康隆、3) 筒井康隆の第三の自己である樫沢たちがいる世界、4) 樫沢が書く貴野原たちの世界、5) 貴野原がやっているゲーム「まぼろしの遊撃隊」の世界。[中略] この小説ではそれらのレベルが順番に繰り返して螺旋状の回転を作り出し、ストーリーを加速させた結果、語り手である樫沢も自身が作る虚構の内に入ってしまった」(p. 329)¹¹。

このように大上が解説している複数の物語世界による螺旋運動は図1のように図式化することができる。

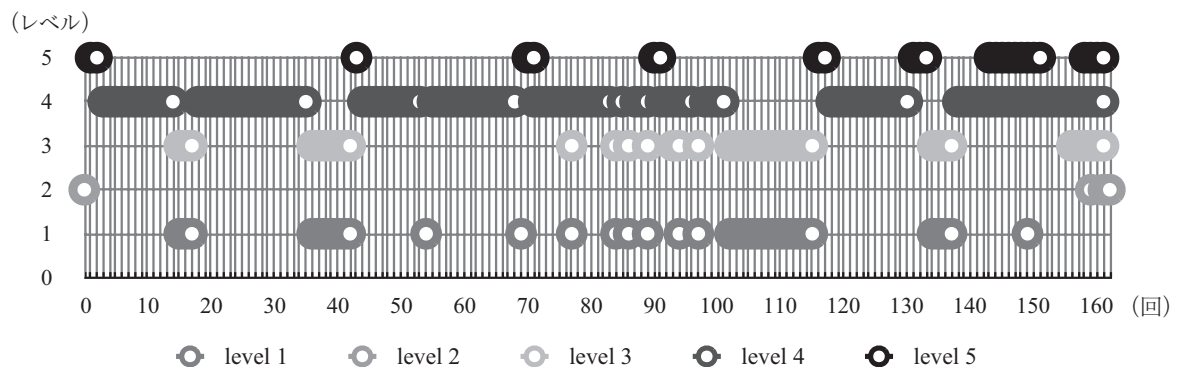


図1 物語のスパイラル構造

図から判るように、物語は第4レベルの貴野原たちの世界を中心に物語の進行にあわせてレベル間を行き来している。これを「スパイラル」と呼ぶことを可能にしているのは、物語が物語世界という観点で複数のレベルの移動によって振幅を導入しつつ、物語時間という観点からは、時間的線状性を維持しているかのように構成されていることに起因していると考えられる。

¹¹ 大上朝美、「電腦録——解説にかえて」、『朝のガスパール』、p. 329。以下本章本文中のページ表記は特に指示がない限り、同書を参照すること。

例えば、最初のゲーム「まぼろしの遊撃隊」で貴野原征三のシャドウである第二分隊長の深江が遊撃隊長の花村に対して「隊長は、気が違っている」(p. 11) と考えるが、その考えは続く第4レベルの記述において貴野原が「隊長の花村は気が変だ」(p. 11) とゲームに入力するその行為を導いているし、さらにそれに続く最初の企業パーティの場面で、企業の重役たちが交わす花村の話題をも導いている¹²。このように、連載の進行と物語の時間は交錯することはなく基本的に並行関係を維持して展開しているものであり、線状的な物語時間の推移を基盤に物語世界のレベルを移動させていることが、物語の「スパイラル構造」という表現を可能にしているのである。

1.3. 読者の物語世界への参加

ところで前述したように、この作品が読者からのフィードバックを反映させるという技法を用いている。それでは、読者はどのように物語に組み込まれるのだろうか。物語世界のレベルという観点からいうと、読者が属していると見なされている物語世界のレベルは第1レベルである。図1から明らかのように、いくつかの例外はあるものの、読者たちのレベルは常に作家・樫沢たちの属している第3レベルと一緒に物語に登場していることが判る。このように第1レベルと第3レベルが混在している場合の物語内容は定形化しており、樫沢が読者からの投書などを紹介する場面が描かれている。

最初に登場するのは11月1日付け連載第15回で言及される「大阪一律大学文学部の棚部という教授」(p. 35)である。大学名は架空のものだが、物語では投書自体は実在であると記述されている。また同じ回には「横浜市で主婦をやってらっしゃる上地知佳子さん」(p. 36)や「岡崎市の片岡さんと江さん」(ibid.)、「大阪和泉市の松崎章生さん」(ibid.)というように名前と共に、投書の内容が紹介されていく。このように公約通り、作品中に書面による投書が実名を付されて、物語の構成要素として組み込まれていることを確認することができる。無論、それによって投書の実在性が証明されるわけではもちろんない。すべてが虚構の可能性もあるものであり、BBSの発言4174番でも朝日新聞社の編集部員が、投書の虚構性の可能性を指摘している¹³。しかし、読者の実在性の問題を留保するにしても、読者が作品の感想を述べる主体として作品に組み込まれていることを確認することはできる。書面による投書だけでなく、BBSでの発言も物語に導入される。最初はBBS内で「やまもも」という名前で作品に対する批判的な発言を繰り返していた人物で、11月26日付の第41回に次のように言及されている。

[略] そちらのパソコン通信での反応はいかがですか。パソコン通信によるエクリチュールだと思いでいる人がいるっておっしゃっていましたが」

うん。これは奈良市の坊さんなんだがね。『やまもも』というハンドル・ネームで、ネット内のヴェテランだったわけだが、いくら言っても、あくまで投書が主、パソコン通信が従だということがわからない。おれを新米のネットワークャー扱いして主導権を握りたいわけだな。まず最初は、小説を新聞に載せる前にネットに載せて自分たちに見せろというんだ」

「新聞の内容を発売前に見せろなんて、総理大臣でも言えないことですよ」 澱口が色をなした。(p. 85)

ここで作家・樫沢が紹介した「やまもも」による主張は、次に挙げるように、BBSの発言1348番で確認することができる。

12 「水割りのグラスは受けとったものの、さらに数人の遊撃隊フリークがわらわらと集まってきたため、貴野原は奥へ行くこともできない。それは教育図書出版社社長の藤川、不動産会社重役の宇佐見、銀行頭取の岡といった連中である。話題は当然「花村隊長のビョーキ」であり、みごと正解を出した貴野原を中心にして会話が白熱するさまを、貴野原の横に立って石部智子はなにかばあきれ、眼を丸くして聞いている。」、『朝のガスパール』, p. 20.

13 発言4174番。『part 2』, p. 241.

<1348> tti/salon, PK8H-TOYM(當山 日出夫), 91/10/25 18:13

標題：面白いかどうかではなく

[略]

しかし、電子化テキストとしての小説が登場した時、この〔物理的〕制約は、根底から崩れるほかありません。

この視点からするならば、既存の枠組みである「書物」によりかかった形でしか成立し得ない（既存の）メタフィクションというのは、その持つ意味が大きく変わってくるにちがいないと思います。

たぶん、このことは筒井さん自身がわかって「朝のガスパール」を書いているはずだと思っています。そして、わかっているからこそ、「朝のガスパール」の電子媒体版とでもいうもの、つまり、このネットに原稿をアップするということが、なされないのではないでしょうか（もちろん、朝日新聞との契約内容にもよりますが、この点は、いずれ明らかになるでしょう）。

[略]

やまもも¹⁴

あるいは、読者が登場人物として物語に組み込まれる場合もある。主にパソコン BBS に参加している人たちがその対象になっている。連載第43回の物語世界のレベル5で「多元宇宙生物」の別名として与えられる「トララ」(p. 88) は、BBS 内の「LL7K-SRI (白井浩司)」が使っているハンドル・ネーム「トドラ」に由来すると考えられる¹⁵。さらに同様の導入方法は、第67回の「蝙蝠」が「IE4I-KUMR (幸森軍也)」(p. 135)¹⁶から、第69回の「英吉」が「GI4E-OKD (岡田英吉)」(p. 139)¹⁷から、第70回の「穂高」が「DR8Y-FRT (古田祐子)」(p. 141)¹⁸から、第80回の「颯颯の大魔王」が「UT6G-HYKW (早川玄)」(p. 160)¹⁹から、第90回の「アホウドリ」が「IK2S-HRIS (平石滋)」(p. 179)²⁰から、第141回の「凡亭」が「XV3H-INUE (井上宏之)」(p. 275)²¹からというように、BBS 内の発言者のハンドル・ネームに由来する登場人物が物語に導入されていることを確認することができる。

いずれにせよ、このように物語の中に読者を登場させることで物語世界のレベルを移動させることが可能になっているのである。すなわち物語レベルの振幅は、読者という要素の導入によって「入れ子構造」を持つ伝統的な小説よりもその振幅が大きくなっているといえよう。

作品に読者が導入される別の例としては、BBS に参加している読者の実名が投書内容と共に作品に導入される場合をあげることができる。

「投書が掲載されて恥をかいたという人たちから、パソコン通信のメンバーだけ本名を出さないのは不公平ではないかという抗議がいくつか来てるんですが」

14 『part 1』, pp. 252-253.

15 本人が発言4783番で喜んでいるのを確認できる：『完結編』, pp. 26-27.

16 『完結編』, pp. 143-144参照。複数の発言者が「こうもり」ことID番号「IE4I-KUMR (幸森軍也)」が小説に登場したことに言及している。

17 第69回では名前は登場せず「『帰ってますよう』隣の応接室から樾沢の長男の声がする。」(p. 139)と言及されるだけに留まっているが、「長男」の名前が「英吉」であることが分かるのは、連載第102回中の「卒業試験を終えて帰ってきたひとり息子の英吉もいて、[...]」(p. 202)との記述が最初。発言15346に引用された発言15342のタイトルからも「英吉」がID番号「GI4E-OKD (岡田英吉)」であると認知されていることが分かる（『完結編』, p. 247）。

18 発言8688番で確認できる（『完結編』, p. 151）。

19 発言10388番で確認できる（『完結編』, p. 162）。

20 発言12283番で確認できる（『完結編』, p. 187）。

21 パソコン通信の発言を再録した『電脳筒井線』では確認できない。しかし、「凡亭」というハンドルネームの発言者は連載第11回の1991年10月28日から掲示板に発言を繰り返しており、作品に対しての批判を繰り返していたことは、『part 2』に収められた一連の発言から確認できる（pp. 23-68）。

「そうか」櫛沢は天井を仰いだ。「おれ自身がそもそも SF 寄りの立場だからつい擁護していたが、考えてみれば読者参加として同じに扱わなければいけなかったんだ」

「そうですよ」

「よかろう。泉卓也という男だが」櫛沢は言った。「この男、『小説を自分の頭の中で映画を撮るようにして読む』というとんでもない男で、まあ最近そういう読み方で充分という小説がたくさんあるからこれはいいとして、そういう読み方をした時、パーティー・シーンにリアリティがない、登場人物に動きが少ない、安っぽい書き割りしか浮かんでこないなどと難癖をつけはじめた。反論を封じるためか、例えば『文学部唯野教授』におけるバーのシーンなどは『その店のソファの素材の手触りまで感じられたものでした』などと。」 (pp. 203-204)

ここで登場する「泉卓也」という固有名詞は、BBS に参加していた実在の人物であり、引用部分で櫛沢が言及している発言は、1991年11月13日午前2時46分に投稿された2825番の発言に対応している²²。注目すべきはこの泉による発言が物語内で言及されるのが、新聞連載の回数でいうと25回目にあたるということである。連載第25回目は、物語内で最初に投書が紹介された後で、投書の要望に従って物語内容を SF ではなく「ドメスティックな続き」(p. 40) を書くと櫛沢が発話した、その後続く場面である。その後連載では18回にわたって貴野原夫人・聡子が参加するパーティの場面が続けられている。ところが、物語がこの BBS での泉発言に言及するのは、連載の103回目、1992年1月31日になってからである。実はすでに引用した「やまもも」への言及も、物語の中に登場したのは11月28日付け第41回だったのに対して、「やまもも」による BBS の投稿は10月25日、連載第8回が発表されていた頃で、1ヵ月程度の時間的なずれが生じている。もちろん時間的なずれは、筒井がある程度連載原稿を書きためていたことから考えると、ある程度は許容されるであろう。しかし、「泉卓也」の例では、2ヵ月以上の時間的なずれが生じているのであり、線状的な物語時間が大きく崩されていることになるのである。ところが、こうした物語時間の操作は、十分に意識されたものであったということが作中の作家・櫛沢の発言から確認することができるのである：

「直線的クロノスの時間の破壊。それも面白いな。ふふふふふ。回想やタイムトラベルではない絶対的時間の真の逆行。ひとつくらいあってもよかろう」ぶつぶつ言いながら彼はキイを叩きはじめ、聡子の向かう PFS の画面に剣持を呼び出した。

「さしでがましいことだったかもしれませんが」剣持は両手の鳩尾のあたりで揉みながら言った。

(pp. 177-178)

この引用の最後の描写は、連載第78回の最後の部分に続く物語であり、これにより第78回から第88回までの部分では物語が2つに分岐したことになるわけである。

22 <2825> tti/salon, HP9T-IZM(泉 卓也), 91/11/13 02:46

標題：電脳筒井線は順調に走っているようだけど。

[略]

わたしの悪い癖で、映画を自分の頭の中で撮りながら小説を読むのですが、経験的に、よくできた小説は映画のカット割などもピタッと決まるものです。

唯野教授が留学と偽って潜伏している同僚とバーでバッタリ出会うシーンは、その店のソファの素材の手触りまで感じられたものでした。或は、見たこともない反動教師とデモ隊が文庫本の中で大立ち回りをしていた姿は、中学生の頃の記憶にはっきり残っています。

ところが、この『朝ガス』ではパーティのシーンをはじめ、全体に奥行きがない、狭いスタジオと安っぽい書き割りしか浮かんでこないのです。パーティが多重構造の階層を破るタイムトンネル的な役割を果たすとして、パーティそのものにリアリティがないのでは、嘘、絵空事、虚構のプロットにはなり得ないのではないのでしょうか。(『part 2』, pp. 133-134.)

このように『朝のガスパール』は、物語世界のレベルと物語時間の二つを作者が自由に操りながら、読者を作品に呼び込み、物語世界の内と外とを融合させることで、作品の「スパイラル構造」を構築しているのである。

2. 作者という求心力——『電車男』の変遷

2.1. ハイパーテキストから印刷されたテキストへ

『朝のガスパール』の実験的な試みから13年後に、一見すると同様のアプローチを採用しているかに見える『電車男』が発表された。『電車男』は、インターネット上の掲示板「2ちゃんねる」上で交わされた書き込みを、そのまま出版した日本初の小説として刊行された。作品は書籍として出版された後に、映画、テレビ・ドラマ、漫画などにも翻案され、商業的に大成功も取めた。その後も同様の試みが続けられており、最近の例では同じく2ちゃんねる上でのやりとりが『ブラック会社に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない』とのタイトルで書籍化、映画化されるなどしている。

物語の梗概は次の通りである：いわゆるアキバ系オタクの青年が秋葉原帰りの電車の中で酔った老人に絡まれて言い合いになった末に、老人が振りかざした手が隣の女性に当たってしまう。事件として警察に当事者たちは引き渡されるが、警察での調書作成が終わって別れ際に、被害者の女性はオタク青年にお礼をいい、オタクの名前と住所を控える。この顛末をオタクは2ちゃんねるに書き込み「電車男」と2ちゃんねる上で呼ばれるようになる。2日後に女性からエルメスのカップが送られて来たため、女性は掲示板ではエルメスと呼ばれる。電車男とエルメスが電車の事件をきっかけに出会い、女性慣れしていない電車男が、エルメスとのデートを逐一掲示板に報告し、掲示板の参加者からのアドバイスに耳を傾けながら、恋を成就させていく過程を物語は描く。

既に述べたように『電車男』には、2ちゃんねる上に書き込まれた最初のテキストである「生の」物語と書籍として刊行された物語が存在している。本稿においては、前者を「第0版」²³、後者を「第1版」と呼ぶことにする。二つのテキストを時系列に並べれば、第0版が最初に存在し、それを元にして第1版が作成されている²⁴。両者の違いとしては字句に関わるよりもむしろ編集上の配慮とでもいえる点において共通する次の3点を指摘することができる。すなわち、第0版から第1版への加筆、修正、削除である。こうした操作は、テキスト生成の過程で一般的に行われるものであり、それ自体として新奇なものでは無論ない。

具体的な相違点としては、加筆に関しては第0版にはなかった語り手の発話が第1版には付け加えられていることを指摘することができる。それだけにとどまらず、刊行された物語では、加筆された語り手の発話に対しては、矩形がテキストに加えられ示されている。

23 第1版の巻末には初出として、「男達が後ろから撃たれるスレ 衛生兵を呼べ」[<http://www.geocities.co.jp/Milkyway-Aquarius/7075/>]が指示されている。またこれとは別のログとしては、「電車男@全過去ログ」[<http://f41.aaa.livedoor.jp/~outerdat/>]がある。後者は、前者に含まれていないログを含めて関連するログをまとめている。両サイトとも2010年1月現在アクセス可能。

24 第0版にあたる最初の掲示板が2ちゃんねる上に作成され物語が始められたのは、「男達が後ろから撃たれるスレ 衛生兵を呼べ」に従えば2004年3月6日であり「電車男@全過去ログ」に従えば2004年3月10日であるが、出版社から第1版が刊行されたのは、奥付より2004年10月20日と分かる。

後にある住人が語った。「正直に言おう、俺は最初電車を舐めてた。お礼の電話一本を掛けるのにうじうじしやがって。よしここは俺達が徹底的に電車をサポートしてやらなきゃなって感じで。しかし今では電車は俺の遙か前にいる。」電車の中で勇気を見せた電車男。電車の外でも勇気を発揮できるのか？ (p. 6)²⁵

こうした語り手のテキストは、第0版には存在しておらず、第1版の364ページ全体にわたり全58箇所が新たに挿入されていることが確認できる²⁶。こうした加筆は、発言番号、発言者のハンドルネーム、投稿時間といったいわゆるヘッダ情報を伴い、非常に形式化されたテキストによって構成されている中で、明らかに異質な部分として第1版のテキストに存在している。さらに第1版では、物語テキスト全体が、7つの章に分けられており²⁷、各章の最初と最後に必ず、新たな語り手の発話が挿入されている。これらの加筆は、ほぼ6ページに1回の割合で確認されることになり、第1版の刊行にあたって全面的に物語が見直されていることを示しているといえる、確かに、この無視できない加筆を除けば、掲示板の記録を掲載されていない発言はあるものの、基本的には第0版の記録に残されている字句通りに第1版に掲載している。

しかし、この加筆は物語全体に対して大きな改変をもたらすものとなっていることを見落としてはならないだろう。すなわち、第0版においては物語世界内に存在する語り手としての「電車男」が物語世界の時間と同期した時間性の内に語りを行っていたのに対して、第1版では、矩形で記される語りの挿入により、物語世界内に依然として属しているもののレトロスペクティブな視点をもつ語り手へと、語りが変質しているのである。実際、引用した箇所は物語テキストの冒頭に置かれているにもかかわらず、「電車の中で勇気を見せた電車男」と、まだ語られていない出来事についての言及を含んでいるのであり、物語世界に対するレトロスペクティブな視点の存在を明らかにしているのである。このように、テキスト内の布置構造を考えると、第0版から第1版への加筆がもたらした影響の大きさは十分に強調されるべきであろう。

もう一つの相違点である変更という点から指摘できるのは、第0版においては掲示板システムが付加するヘッダ情報によって画一的な形式を与えられていたテキストに対して、第1版ではある発言をグレー地で示すことによって他の発言から区別しようとする配慮を指摘することができる。例えば次に引用した5つの発言のようである。

731 名前：Mr. 名無しさん 投稿日：04/03/14 21:25
 すまん。俺も裏ぐった。
 文才が無いから、過程は書けないけど。
 このスレまじで魔力ありすぎ…
 おまいらにも光あれ…

(p. 6)²⁸

25 引用ママ。

26 加筆箇所の第1版でのページ番号は以下の通り：6(2箇所)、13, 23, 24, 29, 33, 38, 47, 56, 60, 64, 66, 80, 85, 105, 114, 116, 128, 135, 137, 140, 143, 144, 154, 159, 162, 165, 173, 177, 188, 190, 198, 203, 208, 212, 222, 224, 231, 236, 242, 248, 252, 271, 272, 287, 291, 293, 303, 317-318, 320, 325, 335, 343, 349, 352, 357, 364。

27 各章は基本的に「Mission」と題されている：「Mission. 1 緊急指令「めしどこか たのむ」」、「Mission. 2 「ちゃんと掴んでますから」」、「Mission. 3 彼女はそっと俺の手を引く」、「Mission. 4 このカップを使う時が来た」、「Mission. 5 「あんまりその気にさせないで下さい」」、「Mission. 6 奇跡の最終章」、「後日談 「こんなに頑張ってたんだ…」」。

28 本章本文中におけるページ番号は、特に指示がない限り次を参照のこと：中野独人、『電車男』、新潮社、2005。

777 名前：731 こと電車男 投稿日：04/03/15 19:27

>>772

普通のアニヲタ、ゲーヲタの秋葉チャソです…」| | ○

年齢=彼女いない歴

無論、童 t(ry

でも、俺ががんばってみよ

(p. 12)

617：電車男 ◆nm4g8qV1Cg：04/03/21 22:18

おk、通話終了します。

約束取り付けましたよ(;´Д`)ハアハア (;´ Д`)ハアハア (;´ Д`)ハアハアハアハア :.;:..° Д:.`

でもやっぱ緊張する…_| | ○

(p. 60)

987：電車男 ◆SgHguKHEFY：04/03/26 14:03

どもです。今日は半休もらってきました。

いよいよ緊張してきた…_| | ○

(p. 63)

316：電車男 ◆4aP0TtW4HU：04/04/27 21:11

新トリです

今度はばれないでしょう

(2ちゃんねる、「とんがり帽子をくれたムーミン Part8」)²⁹

注目すべきは、ここに引用した5つの例は全てグレー地が与えられているという点では共通しているものの、発言のヘッダ部分の「名前：」は、「Mr. 名無しさん」、「731 こと電車男」、「電車男 ◆nm4g8qV1Cg」、「電車男 ◆SgHguKHEFY」、「電車男 ◆4aP0TtW4HU」とすべて異なっていることが分かる。無論全てのハンドルネームが「電車男」に関連づけられていることから、グレー地が与えられている発言が「電車男」によるものとして、他の発言から区別されていると分かる。この変更は、現在のインターネット掲示板の多くが、発言者のIDなどを表示するシステムで運用されていることが多いのに対して、『電車男』の掲示板が始まった当時は必ずしもIDが表示される掲示板ばかりではなかったため、誰が発言しているのか分からなかったことに起因していると考えられる。特に2ちゃんねるの特徴として、筒井が読者導入の小道具として使ったハンドルネームは、発言者が代わっているとしても掲示板ごとに1つのハンドルネームを使うという慣習があるため、『電車男』においては用をなさないのである。

このように、『電車男』が使っていたBBSシステムの制約のためID番号によって発言者を特定することができない場合があり、そのため実際には異なる発言が異なる発言者によって発せられたものかを検証することはできない。これは、筒井が『朝のガスパール』で使っていたBBSシステムと大きく異なっている点である。『朝のガスパール』では、BBS内での実名公開が原則となっていたために、郵便による投書が架空のものであったとしても、BBSに書き込まれた内容の実在性を疑うことができず、そのために読者の実在性がある程度保証されていた。しかし、『電車男』では、実名どころかIDすら公開することなく掲示板への書き込みを行うことができるのであり、物語の中に導き入れられる読者が実在の読者なのかそれとも語り手による架空の読者なのかを判断する客観的な根拠は存在しないことになる。

29 刊行された小説には未収録の発言：URL：<http://f41.aaa.livedoor.jp/?outerdat/1082977173.html> 参照。2010年1月10日現在は削除され閲覧不可。

第0版と第1版の相違点のうち最後のものは削除に関わるものであるが、これについては本章第2節において詳述することにした。いずれにせよこのように、『電車男』の第1版は第0版に対して、1) 語り手の発話が付け加えられている、2) 電車男の発話はグレー地で他と区別して示されている、3) 掲示板の記録にあって作品から削除されている発言もある、という3点で異なっているのである。そして正にこれらの相違点の故に、『電車男』の2つの版は2つの異なる物語世界を提示することになっているのである。

本論の目的は、ハイパーテキストにおいて「作者の再布置化」が起こるのかを確認することであった。それ故、本稿の以下の部分においては第0版の『電車男』を考察の対象とするが、第0版については残念ながら全ての記録が残されているわけではない。そのため、論点に関わらないかぎりにおいて第1版を参照すると共に、文中にページ数を記す場合には第1版でのページ数を示すこととする。

2.2. ハイパーテキストにおける作者

『朝のガスパール』も『電車男』も、読者を物語の中に組み込む、という点では物語技法を共有しているといえる。『朝のガスパール』が、読者の発言を直接引用するだけでなく、登場人物として導入したりと、作品に読者を取り込む方法が多岐にわたっていたことはこれまでに確認した通りである。それに対して『電車男』では、登場人物の一人である「電車男」が、エルメスとの間で交わした会話の内容などを掲示板へ書き込むことで物語が進む。つまり、電車男が掲示板へ報告した内容に呼応して、第三者の書き込みがあり、その繰り返しによって物語が進展していくのであり、それ以外のやり方で読者が物語世界に侵入してくることはないのである。こうした物語の特徴は次のような発言から明らかであるといえよう。

360 名前：Mr. 名無しさん 投稿日：04/04/18 19:34
電車来ねえ・・・いつまで待たせる気だ
連結作業に時間がかかってるのか？

362 名前：Mr. 名無しさん 投稿日：04/04/18 19:45
夜に親帰ってくるのに、電車はまだかえってこねえええええええええ。(p. 177)

この引用からは、「電車」男による書き込みがなく、話が進まないことにじれったさを感じている読者の発言を確認することができる。すなわち「電車男」と呼ばれる発言者は、明らかにこの物語を進める語り手の役割を担っているのであり、読者の書き込みや物語への参加も語り手の存在なくしては物語の中で機能しないことが明らかである。

また、掲示板に報告中の出来事と全く関係のない書き込みがなされても、語り手がその書き込みに対応する発言をしていない。これらのことは、自らの体験を報告している「電車男」が、ストーリー展開を実質的に統御していることを示しているといえるだろう。さらに、読者が物語の進行とは無関係な書き込みをしている場合には、刊行されたテキストからは削除されていることも確認することができる。

780：Mr. 名無しさん : 04/03/15 19:32
連絡どうこうじゃなく、おまいは一步前進したな。
俺には真似できん神業だ |_| | ○ (p. 13)

781：Mr. 名無しさん : 04/03/15 19:33
ガングレ電車男！ (2ちゃんねる、「金曜の夜は胸が騒ぐよ」)³⁰

782：Mr. 名無しさん : 04/03/15 19:33
今のところ ◆4e が一番面白いけどな。

30 次の URL を参照のこと：<http://f41.aaa.livedoor.jp/~outerdat/1079086972.html>

ところで口を「くち」と発音しているのは俺だけじゃないはずだ。[略]

(同上)

上に引用した発言780番は第1版に残されているが、続く781番と782番の発言は削除されている。特に782番の発言には、「今のところ◆4eが一番面白い」との言及があり、この掲示板では複数の物語が複数の投稿者によって同時進行していたことを証言している。782番で言及されている「◆4e」とはID番号「◆4eq5Z7UCHM」として、やはり恋愛話を掲示板に投稿していた投稿者を指しているし、それ以外にも「AT」というIDで投稿していた人も、残された掲示板のログから確認することができる³¹。

このように物語内の語り手である「電車男」と同じく、テキストの作者である中野独人も、作品としての全体性を損なわないように配慮をしているということができただろう。そして、読者はそうした作者あるいは語り手の操作に対して抗う手立てを持っていないのである。

2.3. 物語の求心力としての作者

以上の考察から少なくとも、物語の刊行に際して読者の作品生成への参加は作者によって取捨選択されているということを確認することができるが、さらに刊行にあたっては掲示板の発言時間を無視して編集されていることも判る。

596 : Mr. 名無しさん : 04/04/04 22:33

電車も天然だろうけど

エルメスも天然ぽいな。

案外気づいてないかもよ

(前掲書、pp. 120–121)

(2ちゃんねる、| (●)(●) |³²)

55 : Mr. 名無しさん : 04/04/04 00:44

エルメス語録

「ははw、実はカマかけてたんですw」

「はい。ちゃんと掴んでますからw」

「きつと言っても聞かないんでしょうねw」

「友達にはよくムーミンに似てるって言われるんですよw」

「和食ってなんか電車男さんらしいですね」

「そうですか？w じゃあ私もおめかししていきますのでw」

(p. 121)

598 : Mr. 名無しさん : 04/04/04 22:34

>>596

そうかなー

天然系に語録>>55のような台紙は出てこんだろ

(p. 121)

掲示板へ発言がなされた時間は、掲示板上のハンドル・ネームの右に記載されるようになっている。ところが、投稿時間順に掲載されていない箇所を17箇所確認することができる。上に取り上げたのはそのうちの一つだが、ここで順番が入れ替わっているのは、発言598番の中で「天然系に語録>>55のような台紙は出てこんだろ」とあり、発言55番が指し示されているため、598番の直前に55番を置くことで、598番の発言内容の理解を助けることを目的としていると推察することができる。いずれにせよ重要なのは、こうした物語時間の操作は、刊行された『電車男』では、頻繁に行われているということである。

これまでの考察からわかるように、『朝のガスパール』以上にハイパーテキスト的な『電車男』においても、

31 ID番号「◆4eq5Z7UCHM」の発言については、注25のURLにあるログの発言202番から514番まで、ID番号「AT」の発言については、同URLの発言37番から192番を参照のこと。

32 次のURLを参照のこと：<http://f41.aaa.livedoor.jp/~outerdat/1080994193.html>

一度紙に印刷され刊行されれば、通常の小説と同じように、作者によって再構成されなければならないということを表しているだろう。つまり、読者が物語世界の中に入ることができるかどうかは、結局のところ作者の判断に委ねられており、読者が物語の中に勝手気ままに闖入していくことはできないし、物語の時間も作者の基準によって組み替えられることもあり得るのである。

このことはオンライン上でハイパーテキストとして『電車男』を読む場合も同じだろう。2チャンネルの閲覧・書き込みには当時から専用のソフトがしばしば使われており、そのようなソフトを使うと、ある投稿への返信の投稿がどのように行われているかを簡単に確認することができるようになっている。また、専用ソフトを使わなくても、例えば先ほどの598番の直前に55番を置くようなことをしなくても、多くの場合クリック一つで該当する投稿を参照することができるような仕組みが、掲示板システムには備わっている。これによって読者は、『電車男』でいえば、電車男の投稿に対する返信を簡単に書くことができるわけだが、とはいえたえ掲示板内であっても、電車男は読者の投稿を無視して進むこともできるわけである。実際に引用に挙げた782番の発言に対しては、掲示板内でも電車男は782番に対する返事を投稿していなかった。このように、オンライン掲示板内であっても、物語を進める力を持っているのは語り手である電車男なのであり、語り手という求心力なしにテキストが物語として成立するとはいえないのである。

結 論

本稿の冒頭で私たちはハイパーテキストにおける作者は読者によって再布置化されるのかという問いを立てた上で、物語世界へ読者を介入させようとする2つの試みを考察してきた。

『朝のガスパール』は、新聞連載という古典的な発表形式を取りながらも、それをパソコン通信の掲示板と連携させ、掲示板内の発言や発言者などを物語世界に取り込むことによって、伝統的なテキストの中にハイパーテキストを取り込むことを目論んだ。『電車男』は、ハイパーテキスト自体を第0版の媒体として利用することをめざし、2ちゃんねるというインターネット上の掲示板システムを使って物語を進展させた上で、その結果を中野独人という作者の名の下に、第1版として刊本にまとめていた。

筒井はパソコン通信の特性を自覚的にその小説技法の中に取り込み、自らが「スパイラル構造」と名付けるような、非線状的な物語構造を実現したが、これはハイパーテキスト的と考えられるようなテキストの特性を本来的に線状的と考えられる印刷された作品の枠組みの中で構築したものであると評価することができるだろう。そしてそうした複合的な特性を持つ作品を実現するために、作者の役割が非常に大きいものであることをわれわれに再確認させてくれているのである。

一方で『電車男』においては、第0版が「語り手」あるいは報告者とBBS内の発言者によるコメントというように、役割分担を明確にしてテキストが構成されていたのに対して、第1版ではそこに第0版での語り手とは別のレベルの「語り手」を新たなフィギュアとして導入することによってしか、印刷された物語を成立させていないという事実は興味深い。このことは、第0版から第1版へとテキストを実現しているメディアが変化することによって、物語構造自体が変化を被らねばならなかったという事実を明らかにしていると考えることができよう。

さらに興味深いのは、第1版において加えられた「語り手」という新たなフィギュアは、それ自体としては印刷される物語テキストが伝統的に保持してきたフィギュアであるが、第0版においても、物語テキストが存在するためには「語り手」というフィギュアが不可欠であることが本稿の考察から明らかになったと考える。

すなわち、『朝のガスパール』のように伝統的な手法をとるにせよ、2ちゃんねる掲示板で展開された『電車男』のように物語外の世界にある読者の声をそのまま物語に取り入れるにせよ、物語テキストが成立する

ためには作者や語り手といった存在（フィギュア）が不可欠であり、読者という新たなフィギュアの導入も作者や語り手の布置構造（コンフィギュレーション）を根本的に変えてしまうものではないのである。

参考文献

- George P. Landow, *Hypertext 3.0*, the Johns Hopkins University Press, Baltimore, 2006.
Theodore Nelson, “A File structure for the complex, the changing and the indeterminate”, *ACM 20th National Conference*, 1965, pp. 84–100.
Roland Barthes, « la Mort de l’auteur », *Œuvres complètes de Roland Barthes*, tome III 1968–1971, Seuil, Paris, 2008, pp. 40–45.
筒井康隆, 『朝のガスパール』, 新潮文庫, 新潮社, 1992.
筒井康隆編著, 『電脳筒井線 [朝のガスパール・セッション]』, 朝日新聞社, 1992.
筒井康隆編著, 『電脳筒井線 [朝のガスパール・セッション] part 2』, 1992.
筒井康隆編著, 『電脳筒井線 [朝のガスパール・セッション] 完結編』, 1992.
大上朝美, 「電脳録—解説にかえて」, 『朝のガスパール』, 新潮文庫, 新潮社, 1992.
柘植光彦, 「筒井康隆・〈メタフィクション〉」, 『國文學：解釈と教材の研究』, 6月号, 學燈社, 1991, pp. 96–97.
中野独人, 『電車男』, 新潮社, 2005.

参考 Web サイト

- Le Monde* [電子版], <http://www.lemonde.fr/> [2009年8月19日参照]
「男達が後ろから撃たれるスレ 衛生兵を呼べ」, <http://www.geocities.co.jp/Milkyway-Aquarius/7075/> [2010年1月10日参照]
「電車男@全過去ログ」, <http://f41.aaa.livedoor.jp/~outerdat/> [2010年1月10日参照]